

- 4) Willa Cather, *Early Novels and Stories* (New York: The Library of America, 1987), p.1296.
- 5) Willa Cather, *The Professor's House* (New York: Vintage, 1990), p.3. 引用は全てこの版により、カッコ内にページ数のみ記す。
- 6) James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life* (Lincoln and London: Univ. of Nebraska Press, 1987), p.298.
- 7) Willa Cather, *Willa Cather on Writing*(Lincoln and London: Univ. of Nebraska Press, 1988), pp. 31-2.
- 8) Rosowski, p. 131.
- 9) 川崎寿彦, 『楽園と庭』(東京: 中公新書, 1985), p. 24.
- 10) Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* の18章は Huck の次のような言葉でしめくくられている。筏を“home”にたとえ、窮屈な他の場所に比べて気楽で快適だとしている。“We said there warn't no home like a raft, after all. Other places do seem so cramped up and smothery, but a raft don't. You feel mighty free and easy and comfortable on a raft.”
- 11) ベルの電話発明は1876年, エジソンの白熱電球発明は1879年, イーストマンのカメラ完成は1888年, と19世紀後半のアメリカでは現代生活に寄与する発明がなされた。
- 12) Rosowski, p. 138.

Augasta sat down by the table and again took up her little religious book. St. Peter, with half-closed eyes, lay watching her — regarding in her humankind, as if after a definite absence from the world of men and women. If he had thought of Augasta sooner, he would have got up from the couch sooner. Her image would have at once suggested the proper action. (255)

前述の「本来の自己」が性愛から切り離されたものであることを考えれば、この引用文中で、教授が「まるで男と女の世界からきっぱりと離れてしまったあとのように、彼女の中に人類 (humankind) を見た」という箇所は、大変重要であると言わなければならない。女性であるがゆえの生活や人間関係に支配されてはいない存在を示すために、“mankind”ではなく“humankind”という言葉があえて使われている通り、オーガスタによって作者は、異性への愛を捨てたとしても、「人間という家族」の中にとどまる生き方を示唆している。その生き方とは、敬虔な独身のカトリック教徒として、人々の「矯正力・救済力」(256)あるいは「苦い味のする薬草」(256)となり、必要とされる時には、人々の死の床に立ち会うという奉仕の生活である。オーガスタが「これまではいつも教授がそれから逃げ出していた、人生の花の咲かない側面」(256)と記されていることから、そのような生き方がこれまでの教授の生き方とは対照的であり、アメリカの「成功の夢」とも無縁であることがわかる。

ともあれ、『教授の家』は「何か非常に貴重なものを手放した」(258)という主人公の認識で終わっている。その結果、教授は自分のいる場所を発見し、旅行から帰ってくる家族にも未来にも立ち向かえると感じている。ここで彼が手放したものは、「愛する人であること、すなわち対象物と結びつこうとする外へ向かう衝動」¹²⁾であるとロソウスキーは指摘している。人がアメリカ社会の前進と共に、夢を追い求めることのできる幸福な時代は去った。自分の内面を社会から守るためには、愛することを断念するしかないのだという一種の諦念の感じられる結末である。

注

- 1) David Stouck, *Willa Cather's Imagination* (Lincoln and London: Univ. of Nebraska Press, 1975), p. 96.
- 2) Susan J. Rosowski, *The Voyage Perilous: Willa Cather's Romanticism* (Lincoln and London: Univ. of Nebraska Press, 1986), p.131.
- 3) Leon Edel, "Willa Cather: The Paradox of Success" in *Willa Cather and Her Critics*, James Schroeter(ed.) (Ithaca, N.Y.: Cornell Univ. Press, 1967), p.263.

右された結果として「成功」し、現在の歴史学教授セント・ピーターとなったが、それに対して、「若いセント・ピーターがソロモン谷に残してきた双子」(239)は終生変わらぬ「本来の自己」なのである。ソロモン谷とは、教授が8歳で引っ越す以前に暮らしていたミシガン湖畔の土地であることを考えれば、第1部で示されていた湖への教授の憧れは、幼年時代の「本来の自己」への憧れへとつながっていたことがここで明らかになる。「本来の自己」はまた、「土と森と水だけに興味のある原始人 (a primitive, only interested in earth and woods and water)」(241)とも言い換えられているので、いわば文明を知る前の自然人アダムにたとえることもできよう。人が「社会的自己」と「本来の自己」とに分かれているとする考え方は、アメリカ文学ではそれほど目新しいものではないが、興味深いのは「社会的自己」を作る要因として「セックス」があげられていることである。

The Professor knew, of course, that adolescence grafted a new creature into the original one, and that the complexion of a man's life was largely determined by how well or ill his original self and his nature as modified by sex rubbed on together. (242)

このような考え方によれば、結婚も父親になることも「セックス」によって左右された偶然であって、「本来の自己」とは無関係であることになる。第1部で見られた教授の家庭生活や妻や娘たちへの嫌悪感は、それらがもともと「本来の自己」とは無関係で、「成功」と同じく社会生活に付随して自分に関わってきたに過ぎないからである。第2部でのトムたちの「幸せな家族」がエデンの園のイメージを持たせられているのも、その家族が男たちだけから成立し、性愛という社会的要素を免れているからに他ならない。従って、「本来の自己」に再び返ろうとすれば、家庭生活を持つ原動力となった異性への愛を捨てなければならず、そうすればその結果として、人はすべての「家庭的、社会的関係から、人間という家族の中の自分の位置から離れ」(250)なければならなくなる。ここに、この世とのつながりを失いかけて、教授の死の予感が生じてくる。嵐の夜に、古い家の書斎で目ざめて、嵐がストーブの火を吹き消し、窓は強風により閉ざされていることに気づいても、彼はもはや助かるために自ら動こうとはしない。

ガス中毒で意識を失った教授を救ったのは、たまたま新しい家の鍵をもらいにやって来たオーガスタであった。次の引用は意識を取り戻した教授から見た彼女の姿である。

トムの発明は飛行機エンジンに利用されるのだから、彼は軍事技術の発展にも寄与したと推測され、戦争の技術を捨てたとされるブルー・メサの住人の目ざしたものとは対立する。さらに、トムは教育によってロドニー的な生き方から離れ、自然からも遠ざかることとなった。とするならば、第2部の最後でトムの経験する感情の高揚は、その後の彼の生き方とは実際には切り離されていたと言わざるを得ない。この時の幸福感を語るトムの言葉を思い出しながら、教授は、トムが目ざしたものと彼が実際に人々にもたらした混乱状態との落差の激しさを感じずにはいられなかったはずである。

III

現在の教授の問題が「成功」以後の生き方であるならば、第2部で語られるトムの物語は彼の問題解決の糸口とはなり得ない。枠の中に見える光景がどれほど魅力的であろうとも、その物語は「成功」以前を語ったにすぎないからである。また、およそ30歳で戦死することによって「世俗的な成功という罫」(236)から逃れ、「幾千通もの無用な手紙を書いたり、幾千もの偽りの口実を作る」(236-1)義務を免除されたトムは、現在の自分の問題とは最初から無縁であったことを教授は認識する。トムがかつては「第二の青春 (a kind of second youth)」(234)を自分にもたらしたと教授が考える時、二人は分かちがたく結びついていた。しかし、妻がロザモンド夫妻とヨーロッパ旅行に出かけて不在の夏の間、家族からも大学の仕事からも解放された教授は、トムとも離れて自分自身に直面せざるを得なくなる。この章では、彼が発見した「本来の自己 (his original ego)」(241)の意味と、古い家の書斎でガス中毒で死にかけた教授がオーガスタによって救われるという結末を中心に検討する。

まず、人生で最も重要なことは「偶然 (chance)」(233)によって左右されてきたと教授はしばしば考えた、という文章で第3部は始まる。ロドニーがポーカーで獲得した金1,600ドルはロドニーとトムとの出会いをもたらし、妻リリアンが父親から引き継いだ年間およそ1,600ドルの遺産は教授夫妻の生活に大きな違いをもたらした。トムとの出会いは「一連の偶然 (a stroke of chance)」(233)の結果であり、「偶然」はまた戦争という「ひとつの大惨事 (one great catastrophe)」(236)においてトムを始めとする多くの若者も、榮譽も、時間そのものさえも消し去った、と今の教授には感じられる。

とするならば、教授の現在の学者としての「成功」も偶然の産物にすぎないのだが、そのような偶然によって作られ、社会的な地位を持つに至った「社会的自己」に対して、「本来の自己」があることを教授は発見する。つまり、「運を試すためにフランスへ行った若いセント・ピーター」(239)は偶然に左

They belonged to boys like you and me, that have no other ancestors to inherit from. You've gone and sold them to a country that's got plenty of relics of its own. You've gone and sold your country's secrets, like Dreyfus. (219)

発掘された壺や鍋を「千年前の哀れな祖母たちの持ち物」(219)とも呼んでいることから、トムにとっては、インディアンの遺跡ブルー・メサが歴史のない国アメリカの数少ない過去からの遺産と感じられていることがわかる。首都ワシントンの人々に幻滅こそしたものの、アメリカそのものに寄せるトムの思いはいささかも変わっていないのである。むしろ純化されている。メサが彼にとって、もはや「冒険」(226)の対象としてではなく、「子供としての敬愛の念」(226-7)を感じる対象になったとは、孤児であるトムがメサの中に自分の源を発見したことを意味している。ワシントンでの幻滅体験、ロドニーとの訣別にもかかわらず、メサで一夜を過ごしたトムは喪失感ではなく、「すべてを発見した」(227)という感情の高揚を感じたと述べて、語り終える。

ただし、忘れてはならないのは、ロドニーから「自分のような日雇い労働者で終わる人間ではない」(220)と言われる、トムのもう一面である。発掘品の売却を非難するトムに向かって、ロドニーはその4,000ドルによって、かねてから行きたがっていた大学に行けるではないか、と思い起こさせる。実際、第1部でわかるように、教育は後にトムが世に知られるようになるための手段となっている。トムの人物設定で押さえておかなければならないのは、彼が、19世紀後半から世紀転換期の前後に至るまでのアメリカ社会と共に動き続けた、ということである。その生い立ちから見れば、トムは西部への移住民(“mover people”)を両親とし、幌馬車で南カンザスを移動中に相次いで両親を失った。まだ赤ん坊であった彼は、機関車技師に引き取られ、少年時代にはニュー・メキシコで鉄道の呼び出し係(a call boy)として働いていた。ある夜ポーカーの勝負で1,600ドル以上獲得したロドニーを気づかって家まで送っていったことから、二人の友情が始まるのである。結核にかかりようやく回復したトムの体を心配して、ロドニーは二人のために家畜会社(Sitwell Cattle Company)のカウ・ボーイの仕事を見つけ共に暮らすことになる。これは、1880年代半ばまで大平原での牛の放牧が一大産業であった歴史的事実と対応するし、トムの後の発明は、それまでは技術の大半をヨーロッパから輸入していたアメリカが19世紀末からは発明において世界をリードするようになったこととも対応する。¹¹⁾このように絶えず動きつづけた彼の人生は、過去のある一点で静止してしまい、永遠に動かないブルー・メサの姿とは対照的である。また、

アメリカ精神の中心地なのである。メサの都市の中心にある塔が周囲の家の群れを統一し、何らかの意味を与えていたように、国会議事堂はトムにとってアメリカという国の精神を体現するものに他ならない。そこで、「宗教的な感情」という言葉が使われるのだが、彼の期待は次々に裏切られる。これもまたアメリカ文学にしばしば見られる少年の開眼というテーマを作者は扱っているのだが、彼は役人たちがブルー・メサには関心がないことに間もなく気づく。インディアン委員会の事務員は「灰皿」として使うために、トムが遺跡から発見した鉢を手に入れようとするし、時間をかけてようやく面会した委員会の長官は、自分の仕事は生きたインディアンが相手であって死んだインディアンには関心がないとトムに告げる。ワシントンでトムの遺跡についての話に関心を示す人物は貧しいフランス人のみで、トムの留守中にロドニーから遺跡の発掘品を買い取った相手がドイツ人とされていることを考え合わせれば、自国の過去にも文化にも現在のアメリカ人は関心を持っていないのだという作者の強い批判がここにかがえよう。つまり、アメリカをアメリカとして成り立たせていた精神は、形の上では首都の名前や国会議事堂という建物として残っているが、中身を支える人間はアメリカの中心地にはもはやいないのである。

それでは、実用品ばかりを重視し、過去などに関心を持たない人々が代わりに何に関心を持つかと言えば、相手にどう見られるかという体面である。スミソニアン館の長官秘書である50歳の学者は「多くの学位を持ちながら、少年に向かって自分を見せびらかすことを価値あることだと考え」（208）、トムが部屋を間借りしている事務員夫婦の生活は「ちっぽけな奴隷のような生活で、体面を保つことに費やされ」（209）ている。いずれも自分の確固とした価値観を持っていないからこそ、他者指向で生きざるを得ない。国会議事堂という中心になるものがありながら、もはやアメリカ精神は人々の心の中心になるだけの力を失っている。夕日に美しく染まるワシントン記念碑と、長い一日の仕事が終わり次々に建物から出てくる事務員たちの姿が対比され、トムの目には「彼らは自由であるべきなのに、奴隷のようだ」（211）と映る。

第2部はトムとロドニーとの訣別によって締めくくられる。ロドニーのポーカー勝負での大儲けのおかげで二人は出会ったのだが、二人の別れもまた金銭が原因となっている。ワシントンに失望したトムがニュー・メキシコへ帰った時、ロドニーの出迎えはなかった。自分の留守中に彼が発掘品をドイツ人に売り、4,000ドルもの大金を得たと人の噂から知って、トムは次のようにロドニーを非難する。

They belonged to this country, to the State, and to all the people.

There was something symmetrical and powerful about the swell of the masonry. *The tower was the fine thing that held all the jumble of houses together and made them mean something.* (180)

[イタリック体は筆者]

この描写からは、隠遁の場である以外にも、教授が目ざす性質をこの都市は幾つか備えていることがわかる。たとえば、クレイン博士の家からの帰途、教授にとって世界がまるでボートのように頼りなく感じられた箇所は先に引用したが、この都市は、石でできており、「彫刻のように静止」している。安定しており、これ以上変化することはない住まいたりうる。また、教授の手入れした庭と同じく「一種の構成」を持っている。互いに寄り集まった家々も、中央の塔により統一され、「何らかの意味を持たせられて」いる。第1部で教授が身を置く各自がばらばらに暮らしている世界とは対極にあるのが、この都市である。

それでは、このような都市がなぜ滅んだかと言え、デュシェーヌ神父(Father Dechene)の推測により考えるしかないのだが、神父は遺跡を調べた上で、その都市を作った種族は「平和の技術を発達させ、食べ物と住まい以上のもものために生きて」(197)、その結果、戦争の技術を捨てたのだと推論する。彼らは、おそらく夏用のキャンプに滞在中、文化も徳性も持たない他種族によって滅ぼされたのだ、というのが彼の結論である。理想を求め、戦争の技術を捨てた結果として種族が絶滅するとすれば、文化の行き着く所には滅亡が待つのは必然となる。

さて、神父の勧めによって、専門家により詳しく調べてもらうために、トムは首都ワシントンに遺跡の発見を報告しに行くことにする。この時のトムは「その真価を認め、その秘密をすべて掘り起こす人」(202)をワシントンから連れ帰ってくることが自分の義務だと疑いもしていない。ところが、このワシントン行きこそが、彼のアメリカへの幻滅さらにはロドニーとの訣別をもたらすことになる。男三人の疑似家族は蛇の侵入によって破壊され、都市を作った種族は理想を求めた結果として滅亡した。何かを信じることのできる少年時代を楽園と見るならば、トムはこの時、自ら楽園を喪失したと言えよう。そこで、彼のアメリカへの幻滅さらにはロドニーとの訣別がどのようにして生じるのかを、次に検討しなければならない。

ワシントンに到着したトムは、青空を背景にする国会議事堂の白い丸屋根に「宗教的な感情」(203)を覚え、「素晴らしく幸福」(203)な気分になる。ワシントンはアメリカ初代大統領の名前にちなんだ地区であり、トムにとっては

第一の楽園は最初に述べた通り、トムとロドニー、それにヘンリーとの三人の生活である。牛の世話をし暮らす二人の身の回りの世話をさせるために、家畜会社の監督が連れてきたのが、「世間から捨てられたイギリス人 (a castaway Englishman)」(175) のヘンリーであった。それまで二人が暮らしていた小屋は、「人が永遠にとどまりたいと思うような場所」(168) にあった。南に面し、低い丘で北側が守られている地形に加えて、すぐ真向かいには大きなメサ（高台）を臨んでいた。また、動植物に囲まれ、絶えず川音が聞こえていた。さらにヘンリーが「素晴らしい料理人で家事が上手」(176) だとわかって、三人は「幸せな家族」(176) のようになる。いずれも孤児である三人が、ここで真の家族を見つけたわけである。言うまでもなく、これは『ハックルベリー・フィンの冒険』(Adventures of Huckleberry Finn, 1885) に描かれるハックとジムのよう、アメリカ文学にはしばしば見られる男だけの疑似家族で、第1部で教授が拘束されている家族とは対照をなしている。¹⁰⁾ 教授の感じる女達への疎ましさを、さらに、ロドニーが母親の再婚のために子供の時に家出し、婚約者に裏切られた結果として孤独な労働者として渡り歩いていることを考えれば、女性がいなかったからこそ、三人の楽園が成立していることがわかる。しかし、前述の通り、メサの北端を探検しに行った折、ヘンリーは額を蛇に噛まれ、顔が腫れ上がって死に至る。アダムとイブのエデンの園からの追放を連想させる出来事であり、読者には作者が楽園喪失のテーマを打ち出していることが感じられる。

ブルー・メサの古代遺跡にもまた、作者は「マザー・イブ」を登場させ楽園喪失のテーマを強調している。初めて目の当たりにしたメサの都市はトムによって次のように述べられる。その都市ががけに面した「大きな洞窟」の中に眠っているとされていることから、第1部で教授が願う隠遁の場を思い起こさせる描写である。

Far up above me, a thousand feet or so, set in a great cavern in the face of the cliff, I saw *a little city of stone, asleep*. It was *as still as sculpture* — and something like that. It all hung together, seemed to have a *kind of composition*: pale little houses of stone nestling close to one another, perched on top of each other, with flat roofs, narrow windows, straight walls, and in the middle of the group, a round tower.

It was beautifully proportioned, that tower, swelling out to a larger girth a little above the base, then growing slender again.

「トムの思い出」, 「秩序が与えられた自然」「トムと過ごした時間」などが示されていることを細かく見てきた。このように, 部屋の中に開いた窓という着想は3部全体の構成方法を示すだけでなく, 第1部で教授が置かれている状況と彼の求めるものが対照的であることを示すためにも用いられていると言える。

ともあれ, 大学の新年度が始まる9月から翌年の5月までの間の教授は, 体は日常生活に置き, 心は枠の中の世界へと, ふたつのものの間で引き裂かれている。リリアンがロザモンド夫妻と共にヨーロッパ旅行に出かけて不在の夏の間, 彼はトムの残したノートに注釈をつける仕事に取りかかる。第2部で取り扱われているのは, それまでは漠然としか自分の身の上を語らなかったトムが, ブルー・メサの発見とその前後を教授に語った体験談の再現である。すでに戦死した人間が突然に自ら語りはじめるのであるから, 第2部が始まった時, 読者には奇異に感じられるが, 勿論, 第2部は教授の頭の中でその夏の間回想されているトムの物語である。トムの物語は「若き日の挫折の物語であり, 少年がだんだん年を取ってくるまでは, 心痛まされがちな種類のことだった」(155)と第1部の最後では紹介されている。

II

第2部「トム・アウトランドの物語 (Tom Outland's Story)」は, 教授の意識が向かう枠の集約と見なされる。家族が不在の間にトムのノートに注釈をつける作業をしながら, 教授の意識は次第にその物語の中に吸い込まれていくのである。前述のように, 作者によれば, 第2部は品物や人が詰め込まれた部屋すなわち第1部に対する風穴としての役割を果たすように着想されたわけだが, トムの物語が第1部とははっきりとした対照をなすとは筆者には考えられない。実際に読んでみれば, ここには新鮮な風ばかりが吹いているわけではないからである。たとえば, 牛の世話をしながら, 「幸せな家族」(176)のように暮らしていたトムと10歳年上の兄のような友人ロドニー (Rodney Blake), 「子供のように単純で親切な」(176)老人ヘンリー (Henry Atkins) の三人の生活は, 8月のある日にヘンリーが額を蛇に噛まれて死ぬことによって破られる。また, 完璧な都市であったはずのインディアンの古代遺跡ブルー・メサでも, まだ若い女の殺された死体が発見されヘンリーによって「マザー・イブ (Mother Eve)」(192)と名づけられるなど, 第2部では楽園とその喪失が繰り返し扱われる。第2部の後半を占めるトムのワシントンでの幻滅およびロドニーとの訣別もまた, 楽園状態の喪失と見なされる。この章では, どのような楽園が描かれ, またそれがどのようにして喪失されたのかを検討する。

の脱出口」「開いたドア」「自由」などの言葉は教授が求めるものをはっきりと示している。湖は、人間関係によって人を圧迫する陸地にあいた穴なのだ。教授の書斎の窓からはまた、トムが研究に励んでいた大学の物理学研究室が見渡せる。この場合の窓は過去への通路となり、研究室の建物に視線を向ける時、教授はトムがそのために日夜働いていた研究への理想と、その研究の成果が生き残った人々にもたらした混乱状態との間の距離を強く意識せざるを得ない。このように窓は、外界や過去へと教授をいざなう枠として働いているが、いずれの場合も、一方では、窓は教授と対象物との間の距離を示すものであることを忘れてはならない。こちら側の世界に閉じ込められているからこそ、教授は窓へ、さらに窓の彼方の湖へと視線を向けざるを得ないのである。

最後の枠として取り上げたいのは、教授が古い家で20年以上にわたって手入れしてきた古い家の庭である。家主アペルホフ (Old Appelhoff) が実質的なものを好み庭には林檎や桃を植えているのに対して、教授の整然としたフランス式の庭には、アペルホフから見れば「きらきら光る実のならない木」(40)が植えられ、よい土地は「無駄にされて」(40)いる。庭を「自然を自然のままの混乱した状態に置くことに我慢がならず、それを整然たる人間的秩序に従わせて再創造した」⁹⁾ものと考えれば、この庭は教授が征服し、秩序を与えた自然を意味している。また、大学教育を受けるためにトムがハミルトンにやって来て、はじめて教授に出会ったのはこの庭なので、庭はトムもおり、教授も若かった過去とも結びついている。トムと教授の出会いの場であるこの庭で、まだ幼なかつた娘たちはトムと遊び、家族が避暑のためにコロラドへ出かけ留守にしている耐え難い夏の間、教授はトムと夜通し語り合った。このため、教授は庭を見ればトムを思い出さずにはいられない。

このように、第1部では、「成功」のあとには衰退があるだけだという暗い見方が示されている。研究者としても家庭人としても一仕事を終えた教授には、その報酬として幸せな晩年が用意されているわけではない。また、トムの発明の成果は、確かにロザモンド夫妻に富をもたらすことになったが、同時にその富は家族の間の不和の原因になるという皮肉な結果を生じた。努力は「成功」へ、さらには幸福へと通じるというアメリカの「成功の夢」は、明らかにここでは否定されている。研究者として、父親として自分の義務を忠実に果たそうとして生きてきた教授は、物質主義に支配された世界の中で身動きがとれず、「非常に疲れて」(143)しまっている。一方で彼は、日常生活の中に開いたいくつかの枠の中のものにしきりに思いを向けている。本章では、枠としての机や書斎、窓、庭を取り上げ、それらの中に教授が求めているものとして、それぞれ「隠遁の場」、「子供時代」「退屈さからの脱出口」「開いたドア」「自由」

れた枠と呼べるものが、『教授の家』の中には頻繁に現れる。現在の教授の意識の中に浮かぶ様々な回想場面も枠の一種であるし、古い家の書斎、窓、庭なども枠の中に数えられる。これらの枠の中には教授の求めるものが存在し、彼の日常生活と絶えず対置されることによって、彼の周囲への違和感が強調される。

具体的には、教授にとって机は「その背後に隠れることの出来るシェルター」(141)であり、書斎は「孤独になり、家庭生活という魅力的なドラマから遮断されることの出来る」(16) 場所ととらえられている。また、哲学者ユーリピデスが年を取ってから「海辺の洞窟」(136)で暮らすようになった理由を、教授は「彼が生涯をかけて女達を身近に観察したせいではないか」(136)と考えている。研究生活とは本来、人が孤独であることを要求するものではあるが、教授の場合はこれらの引用からわかるように、机や書斎は、単なる隠遁の場ではなく、家庭生活や女性達から逃れるための場と見なされている。先に述べたように、トムの遺産は二人の娘達の争いの原因となり、姉への嫉妬のために青ざめるキャスリーの顔の表情は、教授の見守る中で「醜く痛ましい変化」(71)をする。無論、そのような姿を見せつける女性達への疎ましが、隠遁への憧れにつながり、教授が古い家の書斎から離れようとしないう一因となっている。ただ、彼の家庭生活や女性達への嫌悪感にはもっと根深いものがあり、第3部で扱われる「本来の自己 (his original ego)」(241)に密接に関わってくるので、これについては作品の結末を扱う時にあらためて取り上げたい。

窓は何よりも外界への通路を示す。教授の書斎の窓は「光と空気を入れる唯一の入口」(7)であり、そこからはミシガン湖が見える。湖畔で生まれた教授には、湖は子供時代と強く結びついており、8歳の時に一家で湖の見えないカンザス州の小麦地帯に引っ越した時には死ぬような思いをしたほどだった。彼にとって湖がどのような意味を持つかについては、次の文章を見てみよう。

When he remembered his *childhood*, he remembered *blue water*....
 But the great fact in life, the always possible *escape from dullness*, was the lake. The sun rose out of it, the day began there; it was like *an open door* that nobody could shut. The land and all its dreariness could never close in on you. You had only to look at the lake, and you knew you would soon be *free*. (20)

[イタリック体は筆者]

湖の青い色は、勿論トムがニュー・メキシコで発見した古代遺跡ブルー・メサ (Blue Mesa)に通じており、無垢な状態を示す。「子供時代」「退屈さから

する。博士は実学主義、効率主義の大学内で「新しい商業主義」(120)に共に抵抗した唯一の同僚であり、禁欲的な生活を送っていた。自ら言うように「学生の仕事を金銭という点から考えたことはなかった」(129)その彼が、よそ者であるルイがトムが発明から利益を得たのに対して、トムを指導した自分の貢献が認められないことに不満を持ち、利益の分け前を要求してきたのである。人間関係の尺度がここでも金銭に換算されることに教授は絶望感を覚え、博士の家からの帰途、周囲のすべてがボートに乗っているかのような不安定感を覚える。彼の内面を反映しているのか、この場面では公園は暗く、木々の葉は落ちてしまっている。

The park was deserted. The arc-lights were turned off. The leafless trees stood quite motionless in the light of the clear stars. The world was sad to St. Peter as he looked about him; the lake-shore country flat and heavy, Hamilton small and tight and airless. The university, his new house, his old house, everything around him, seemed insupportable, as the boat on which he is imprisoned seems to a sea-sick man. (130-131)

このように周囲の世界は、狭く、息苦しく、金銭の力で人々を支配しながら動き続けていく。教授にとってかけがえのない存在であったトムは、今や一人の人間として思い出されるのではなく、身近だった人々からも「化学薬品やドルやセントに変えられて」(112)いる。これが、教授が現在身を置くアメリカの姿である。

このような世界でトムとの関係を「通俗的な言葉」(50)で言い換えてほしくはないと願う教授は、それではどのような世界や価値を求めているのか。この問題を考える上で参考になるのは、この作品の構成についての作者自身の発言なので、教授の求めるものを検討する前に、どのようにしてキャザーが3部の構成方法の着想を得たと述べているのかを見ておこう。1938年の友人への手紙の中で、パリで見たオランダ絵画には居間や台所が描かれ、そこには船や海に見える窓があったと彼女は言う。⁷⁾つまり、現在の教授を扱う第1部と第3部は、人間や品物が詰め込まれた息苦しい部屋に相当し、第2部はその部屋に新鮮な風をもたらすために置かれた窓にあたるわけである。これは、作者にとってよほど印象的な構図だったらしく、部屋の中の窓という構図は3部の間の関係を示しているだけでなく、この作品全体の語り方そのものにも利用されている。「語りの窓 (narrative open windows)」⁸⁾すなわち作品世界の中に置か

新しい家は妻リリアン (Lillian) により美しく整えられ、家具なども取り去られた古い家はもはや人が快適に住める場所ではない。寝食の場は新しい家に移しながらも、教授はなぜか古い家の書斎で仕事を続けることに固執する。言うまでもなく、彼は新しい家すなわち動き続けるものと、古い家すなわち静止しているものとの間で引き裂かれているのだ。動き続けるものの代表として、作者は決して目に見える大きな社会変化などは取り上げず、教授の身近な家族たちや大学の同僚たちを扱っている。そこで、最初に、教授の家族や大学の同僚たちを取り上げ、彼らのどのような変化が問題になっているのかを検討しなければならない。

まず、家族である。「過去にもどりたいと望みながらもどることはできないと知っているがための緊張感は、キャザーの小説に劇的な性質を与えている」⁶⁾とウッドレス (Woodress) の言うように、いわゆる牧歌的なテーマ (Arcadian theme) はキャザーの作品で繰り返し扱われる。教授とその家族も例外ではない。かつては仲の良かった二人の娘たちの度重なる争いを目撃し、教授は「なぜ子供たちをそのままにはしておけないのか。(耐え難い将来を避けるために子供たちを自ら殺した) メディアの道以外にはないのか。」(107) と時の経過を嘆く。

このように普遍的で人の力では動かしようのない変化に加えて、家族はトムの遺産が原因となり変化したと教授の目には映る。「素晴らしい若い科学者かつ発明家」(30) であったトムは、かろうじて30歳であった時に第一次大戦で戦死し、第1部の時点では彼の死後すでに数年が過ぎているのだが、生前にアウトランド真空装置の原理を発見し、アウトランド・エンジンを作り出していた。遺言でその発明を譲り受けた婚約者ロザモンドは、トムの戦死後、電気技師のルイと結婚し、彼はトムの発明を商品化することにより、財産を作ったのである。二組の夫婦の経済力の違いは姉妹の不和をもたらし、贅沢な毛皮を見せびらかす姉ロザモンドのせいでキャスリーンの顔が「嫉妬で青ざめる」(71) のを教授は目撃するし、キャスリーンの夫スコットは、義兄ルイが文芸協会に立候補することをひそかに妨げようとする。このような不和は二人の義理の息子に対するリリアンの態度にまで、影響を与えずにはおかない。また、新しい家を建て贅沢な身なりをしているロザモンドは、その財産にもかかわらず、逆に、他人への金銭的な援助は拒むようになる。たとえば、娘たちが幼い頃から家に入りしているお針子オーガスタ (Augusta) の投資の失敗を埋め合わせてやる相談にも、耳を貸そうとはしないのである。

さらに、トムの遺産は教授の家族ばかりではなく、トムのかつての指導教官であったクレイン博士 (Dr. Crane) までも変化させていることを教授は発見

劇』(Dreiser, *An American Tragedy*)が「アメリカの成功の夢」の問題点を扱いながらも、夢に向かう人々に焦点が当てられていたのに対して、成功以後の主人公の生き方に重点が置かれている点が『教授の家』の大きな特徴である。

作品の時代背景は、『我らの一人』(*One of Ours*, 1922)の登場人物にとって、「卑しさと貪欲さの洪水が残されたものすべてを飲み込んだように思われる」⁴⁾第一次大戦後のアメリカである。この時代のアメリカは、一般的には戦後景気で繁栄し、様々な新しい風俗が生まれたとされるが、「1922年頃に世界は二つに分裂した」という彼女の有名な発言からわかるように、キャザーにとってはアメリカ社会が大きく変質した時代である。『教授の家』でも人々は物質に大きく支配され、もはや楽園としてのアメリカは失われている。そのような社会に違和感を感じる主人公が、どのようにして生き延びる方法を発見するのか。この論文では、この作品に描かれたアメリカの姿に注意を払いつつ、主人公が「成功のパラドックス」を解決する過程を跡づけることを目的とする。

II

第1部「家族 (The Family)」は、全体の半分以上を占めており、50歳を越えた大学教授セント・ピーターを中心に、彼と家族や大学の同僚たちとの人間関係が紹介されている。第2部を除けば、概ね彼を視点的人物として記述されている。場所はミシガン湖の近くの大学町ハミルトン (Hamilton) である。本章では、教授が置かれている状況と、彼が求めているものを検討する。

教授は、長年の研究の成果である8巻からなる歴史書『北アメリカにおけるスペイン人冒険家たち』(*Spanish Adventurers in North America*)が認められ、賞 (Oxford prize for history) と副賞の5,000ポンドを獲得したところである。二人の娘ロザモンド (Rosamond) とキャスリーン (Kathleen) もルイ・マーセラス (Louie Marsellus)、スコット・マクレガー (Scott McGregor) とそれぞれに結婚しているところから、教授は研究者としても父親としても人生における一仕事を終えた人物として設定されていると言える。ある目標に向かってなされる主人公の苦闘を描いた物語は、主人公がその目標に到達した時には普通終わるのだが、この作品ではむしろ目標に到達した後も主人公は生き続けなければならない。ここに教授の問題の根本原因がある。それをはっきりと示すのは、第1部の最初の文章「引っ越しはすべて終わった。(The moving was over and done.)」⁵⁾である。“The moving”とは勿論、賞金で建てられた新しい家への引っ越しをさすが、同時に教授の中ではすでに一切の動きは終わってしまったことをも意味している。にもかかわらず、周囲は動き続け、彼は絶えず違和感を感じざるを得ない。

ウィラ・キャザーの『教授の家』： 成功のパラドックス

酒 井 三 千 穂

I

見たところ簡潔であった前作『失われた夫人』(*A Lost Lady*, 1923) に対して、『教授の家』(*The Professor's House*, 1925) は、「キャザーのどの作品よりも批評家たちを当惑させてきた」と言われている。¹⁾ 『失われた夫人』では視点的人物としての Niel を設定することによって、少年が成人し、さらにそれ以降に至るまでの物語に統一感が与えられていた。また、少年の視点の対象となっているのは一人の女性であり、時代の推移と共に彼女がどう変化していくかが外側から語られているので、話は時の経過に沿って直線的に展開していく。それに対して、『教授の家』では、作品の中で現在進行しているのは1年余りの間の出来事だが、全部で3部からなる構成はずっと複雑になっており、作品の難解さの一因となっている。主人公の大学教授ゴッドフリー・セント・ピーター (Godfrey St. Peter) の現在の生活を扱う第1部に続けて、現在はずでに死んだことになっている副主人公トム・アウトランド (Tom Outland) が青春時代の経験を自ら語る第2部が置かれ、第3部では話は再び現在の教授へともどるのである。また、扱われているのは主人公の「内面の探求 (an internal quest)」²⁾なので、彼の思考や感情、また回想が様々な出来事の間にはさまれ、話は直線的に展開しているとは言い難い。

この論文のタイトルはレオン・エデル (Leon Edel) の論文 “Willa Cather: The Paradox of Success” から借用したものである。エデルは、作品は芸術家の生涯を反映しているという観点から彼女の作品を解釈し、努力の末に作家として成功したキャザーが、いざ成功してみるとその成果を楽しめなかったことをさして「成功のパラドックス」と呼んでいる。³⁾ 同年に出版された『偉大なるギャツビー』(Fitzgerald, *The Great Gatsby*) や『アメリカの悲